一休さんが教えてくれたこと

新春を祝う言葉が書かれた年賀状をいただくと、ひねくれ者の私はいつも思うことがある。

辺りを見回すと、春の訪れを知らせる桜だってまだ枯れ木のように寒さに震えているではないか。本当に春は来ているのだろうか。そう思うのである。今年などは新型コロナウイルスに翻弄（ほんろう）され、見通しの立たないことにいら立った昨年を経ているので特にそう思う。そんなことを考えていると、一休宗純の逸話を思い出した。

一休さんが歩いていると、見るからに乱暴そうな山伏（やまぶし）が眼前に立ちはだかり、因縁をつけてきた。「仏法は何処（いずこ）にありや」。そう問われた一休さんは「この胸三寸にあり」と答えた。すると山伏は「しからば拝見いたそう」と、小刀を一休さんの胸に突き付けようとした。その時、一休さんは「年ごとに、咲くや吉野のさくら花、樹を割りてみよ花のありかを」と詠んだ。この返しに恐れ入った山伏は後に一休さんの弟子になったという。

さすが一休さんだ。目に見えないけれども、「ない」とはいえないことが世の中にはある。寒さに耐える桜の木には、花のかけらも見つけることができない。木を割ってみても同じことである。しかし、その何もないところから毎年立派な花を咲かせて私たちを楽しませてくれるのが桜の木なのである。これは、人も社会も同様であると一休さんは教えてくれている。

今年がどんな１年になるのか、誰も知らないが必ず花が咲く。今、その花のかけらすら見つけられなかったとしても。必ず花は咲く、そう信じて諦めることなく上を向いて歩こう。冷たくなった手を擦りながらそんなことを思っていると、少し心が晴れやかになった。

謹んで新春をお祝い申し上げます。

たかみ・だいすけ　日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。40歳。

c大分合同新聞社　無断複製転載を禁じます。